



百首部類

如軍家計百之乾坤

百首部類

如法百之乾坤

百首部類

久安所百之一二三回

特別

八4

8196

10





841  
14  
8196  
10

久世清百首

久安六年才二度  
初度者題堀川百首同之

御副表 作者  
景徳院

中納言右衛門督公能

大炊内右大臣之  
徳寺左大臣實能公男

参議左中將教長

左京大史顯輔

前備後守季通朝臣

隆季朝臣

右馬權頭實良清朝臣

丹後守顯廣

改俊成



<2016-208>



散位清輔

大京大夫殿中丞  
母長門守能遠之女  
大京大夫頭李孫  
正四位下

堀川

待賢門院

兵衛

上西門院

安藝

待賢門院

小大進

右細字私考加之

題

春 十首

夏 十首

秋 十首

冬 十首

志 十首

神祇 二首

慶賀 二首

尺教 五首

無常 二首

離別 一首

羈旅 五首

物名 二首

短歌 一首





春 二十首 御製

物縁をそとて徳や二を統れり<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>此<sup>カ</sup>居<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>く<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>母<sup>カ</sup>  
 子の目もとて妻の世をもふ為にれれ松むむも公法す此  
 賤は母のこころをく目と海ありまはらるる菜白もは海を  
<sup>子</sup>載の夜を吹ふ風の初り香紙木もふ春と思を紙  
 大雪は父をばいり梅の花者ととあつた散つてらん  
<sup>新</sup>風吹きし柳のいかにありき浪ふ中をそと海  
 高れ鳴るは初ふ花極きはさともあはれも耳小松  
 を向ともふそらもふ移る高屋台の心のあけを楚  
 山皇公のあけすれをを流はし川さいりさひ高れそりく



















諸ある物入家おれぬるの心何よとねら物ぞと皆

三度

方便品 若有聞法者 無一不成佛

一と心もすし心法と境しと心もとと離れぬ

あふ所不於無量劫中乃至名字

境古  
名と心もすし心法と境しと心もとと離れぬ

壽量品 常在靈鷲山

世の事もたわもるはたしつせもとと心も境もこれ

普門品 弘誓深如海

ちんじを心も境も海も多も心も境もなまぬ物も心

心經 色即是空 空即是色

心も境も心も境も心も境も心も境も心も境も

無常

かこらしむ降海なるこころはこころは世といふは

ちんじを心も境も海も多も心も境もなまぬ物も心

先年况別在人教未終亡儀刹塵心事或

依善於教約露或難紅顏歸昔壤浮生

珍眼慨於境淚故祿之

離別

具津的あちち心も境も多も心も境もなまぬ物も心







何れもく 船のまきうぶこの事と どの心もいかに  
かきりあぐ どの心もいかに どの心もいかに  
おれとと どの心もいかに どの心もいかに

春 二首 中納言右衛門督公能

難波海に白の氷とよらり 昔もよとよきくまや  
夜とこあぐめ 菜摘よとよく 海も遠まよとよ  
あまきり 花の氷も雪はるの 花もけさの  
梅の花もくかきり どの心もいかに どの心もいかに  
かきりあぐ どの心もいかに どの心もいかに  
咲れじの花とえ 花もいかに どの心もいかに

一登よまきり花も玉系 花もいかに どの心もいかに  
りしとよまきり花もいかに どの心もいかに  
約きしとよまきり花もいかに どの心もいかに  
秋村とあぐめ 花もいかに どの心もいかに  
どの心もいかに どの心もいかに どの心もいかに  
此の心もいかに どの心もいかに どの心もいかに  
咲れじの花とえ 花もいかに どの心もいかに  
はまきり花もいかに どの心もいかに どの心もいかに  
どの心もいかに どの心もいかに どの心もいかに  
咲れじの花とえ 花もいかに どの心もいかに



















世の中は名風は流るる池のほとりなる花はよもひ  
我はしらぬのうらみもよもひのうらみもよもひ

離別

物なきをば一一夜のうらみから夜をさるるふりり

薙鬚

私あつてはかたうのうらみもよもひをばよもひの白波  
道は志す約ありきよはちかぬるもよもひのうらみもよもひ  
志ありしと見えし一宿のうらみは恨をとりて物なき  
任る事一宿のうらみの面は約を河原の草もさるる家  
花は一宿のうらみもよもひのうらみもよもひ

物なき

そら

大井のうらみのうらみもよもひのうらみもよもひ

乞とち

夜もよもひのうらみもよもひのうらみもよもひ

短歌

屋まのうらみもよもひのうらみもよもひ  
いしちのうらみもよもひのうらみもよもひ  
おとこもよもひのうらみもよもひ  
いらいとちのうらみもよもひのうらみもよもひ











七夕の夜と云ふも久しと云ふ明かこといはずまはし  
 七夕の海流は龍のちと云ふことしと袖はねらん  
 宵半のあはれもさう時を待たぬと云ふ秋と云ふ人  
 松虫はあつと云ふ時を待たぬと云ふ中を待たぬと云ふ  
 一合のさつと云ふことめと秋は次て日殺へぬと云ふ  
 ちと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ山  
 教のらぬと云ふことめと月と云ふあはれと云ふ  
 けと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ  
 けと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ  
 けと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ  
 けと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ  
 けと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ

七夕の夜と云ふも久しと云ふ明かこといはずまはし  
 七夕の海流は龍のちと云ふことしと袖はねらん  
 宵半のあはれもさう時を待たぬと云ふ秋と云ふ人  
 松虫はあつと云ふ時を待たぬと云ふ中を待たぬと云ふ  
 一合のさつと云ふことめと秋は次て日殺へぬと云ふ  
 ちと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ山  
 教のらぬと云ふことめと月と云ふあはれと云ふ  
 けと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ  
 けと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ  
 けと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ  
 けと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ  
 けと云ふことめと云ふ時を待たぬと云ふ



























とらふことたりしは清く濁敷乃發の雲井は物あそまける  
いさなりこいさひさかきいさかきしはあはれ

秋二十首

新及新及 夜もはまきうきとくれは船もこき月あしひの秋はるる船  
旁より松の葉もよこしは岩も梓を思ひしとわれ  
とくは平とよみり秋乃れ舟の死ふきけりあつた  
七七々たあふ葉とよはしあはれ我ら今もふこころは  
銀河横さる世もせまきしききさひあはれりるる葉  
ふもはさし今もあはれさしけいふもあはれもあはれりる  
天は風もも拂ふ秋はよ月よりあめはあつたときり

秋は風の舟はふきとまきとあはれもあはれりるれ  
秋風よこしきとまきとあはれりるれ月ははれはれは  
秋露は花もさるれ山雲の終りしきいふもあはれ  
志あはれあひしとまきとあはれもあはれりるれは  
浦へはふふりもあはれりるれはあはれりるれ  
新初 月紀もころとまきとあはれりるれはあはれりるれ  
新古四 秋の面もあはれりるれはあはれりるれはあはれりるれ  
くもあはれりるれはあはれりるれはあはれりるれ  
思ふらんもあはれりるれはあはれりるれはあはれりるれ  
お板乃もあはれりるれはあはれりるれはあはれりるれ







我意と君の心とをいかにいかにしめたか  
いそぎ世ふまゝに流してはる人の果をあたえ  
我意うらむいふはなむたはなけとも違ふ  
かまふふふふふふふふふふふふふふ  
中へまゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
くしぬともはけぬなりまはぬ疑面人のまゝに  
よまふふふふふふふふふふふふふふ  
逢ふともいふはなむたはなけとも違ふ  
うらむいふはなむたはなけとも違ふ  
幾どいふはなむたはなけとも違ふ

よまふふふふふふふふふふふふふふ  
かまふふふふふふふふふふふふふふ  
あまふふふふふふふふふふふふふふ  
今更なりまゝにまゝにまゝにまゝに  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに

神紙

かまふふふふふふふふふふふふふふ  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに  
慶賀  
まゝにまゝにまゝにまゝにまゝに



何なりと君よりしひ乃すにせん三花田乃社の子紋も三花  
人教

華嚴經

法男唯心

うらやもるをたしとまう一廿年の家んしおひく子之屋

大集經

二击彈呵

きお小松をりてもみゆりうか人をききぬ人のんは

大品經

畢竟空

何事もひきしとけり法をまはつともわしこまを新し

法華經

道は古ゆいふとくみよりせらふもと世よひありまらわし

炎經

一切衆生悉有佛性

きりん乃んれらふまはむはむらりつとて

無常

相より言とさけりまらりもまらりて世とてしりなり

くらむひくまはにせりる落りりもれまがうま余りなり

離別

まはひきとんりりて改まひまはれやその別るり

四辯經

をたつとひきの別ふれれれ乃てなりをぬ目とる

ちうくくわくわく乃小腰神と杖を落けさる花くれ







みうつるれ

反寄

此等一そぶいりる事と

きれあひ人そふいりそ

春二十首

(十九首せ)

前備後守季通朝臣

いとほり氷れそいおとせけさより喜れ氷うそや年取  
そまを思方にいりる春れあぢれおひもさそとせけ  
あ〜〜くさよよいそのおせをぬさたよあせしりるれ  
卵をつめさ葉は楠つた所も我も首と老後ひらひま  
喜れあひえ〜〜白梅れもさるらり人かとゆりさ  
我らもそふ事もあそはすもあかられ春つりれ  
喜あ乃三つ〜糸よぬさそらひつひた〜玉やあそひ  
き〜〜あひわ〜そあけ建い雲乃〜すもれ乃〜〜いれれい  
喜に控む乃白いえもさもあ〜〜あさ〜〜あひひ暗れ〜



















浪波乃海はわたりを渡る一舟の面も花のほほをいづ

天教

ふくそ半は事と可成りなりとてをゆめをばかきか  
人毎に伝はれおのりとも教をいづるはたは  
西のふりていふはたはたはたはたはたはたはたは  
いふはたはたはたはたはたはたはたはたはたはたは  
わらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわらわら

年寄

現<sup>十七</sup>もふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
現<sup>十七</sup>もふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

離別

たかやうと三つをまじりてあはよきまにそとらふ事なり

罰蒞

みさふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
何れりもさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
あやのさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
たかやうと三つをまじりてあはよきまにそとらふ事なり

物名

腰より上和琴下小まきうた











こよねのまゝあゝさきふゆふより露乃夜ゆくをきつん  
ちひさしとあたら乃から恒乃浦北産こめうる巻れ  
まをれ能為ふうる喜柳乃こ糸にぬふ梅れむさ  
久う爰れ夫き馬乃改らうま乃あゝさきふ言こと地  
兼てより也乃ん残知ゆれいさ記てもらんときり  
也さふあむさあむゆらうるあ年れまにらん  
かゝ夜うく被そ被ほらるる今まもみえさるい  
かゝいまぬは海に流るるいこいこいあやあや  
吾廿いあゆらうるまじいあ乃首れふあゆらうる  
いろうる能もあゆらうるあゆらうるあゆらうる

善しむりまは海に流るるあゆらうるあゆらうる  
爰もさふさあてねるあゆらうるあゆらうるあゆらうる

友十首

あゝいづれまはるるあゆらうるあゆらうるあゆらうる  
いづれと夜がさあゆらうるあゆらうるあゆらうるあゆらうる  
志て乃あえつるあゆらうるあゆらうるあゆらうるあゆらうる  
かゝるれねあゝ能ふ自らん今あゆらうるあゆらうるあゆらうる  
まふゆくたわらふあゆらうるあゆらうるあゆらうるあゆらうる  
わめた也橋乃あゆらうるあゆらうるあゆらうるあゆらうる  
橋乃咲るあゆらうるあゆらうるあゆらうるあゆらうる







吾々のあはれに秋風よこす中もよそなふらうか  
少年時を吾の末残る月乃はえやうに遊うも水  
あさうすさ世れ多く凍てきり秋は夜はふたりや  
うさうに交りよれぬん秋のあうりやうか

冬十首

長月もをたうあふりぬと雲はるもよきやうん  
とじりもとらうと氷ふゆそをたうあふりぬ  
らうらぬ本意も朝は常あういふあうり取とらう  
ちと京本末はをたう目をやうあういふあうり  
あふりぬ松の緑とわうらうあういふあうり

いふらぬ事とらうあふりぬと雲はるもよきやうん  
陰はりあうた雲はるあふりぬと雲はるもよきやうん  
うらうら葉田乃松乃あふりぬと雲はるもよきやうん  
九さうたうらうあふりぬと雲はるもよきやうん  
と雲はるもよきやうんあふりぬと雲はるもよきやうん

冬二十首

あふりぬと雲はるもよきやうんあふりぬと雲はるもよきやうん  
あふりぬと雲はるもよきやうんあふりぬと雲はるもよきやうん  
あふりぬと雲はるもよきやうんあふりぬと雲はるもよきやうん  
あふりぬと雲はるもよきやうんあふりぬと雲はるもよきやうん  
あふりぬと雲はるもよきやうんあふりぬと雲はるもよきやうん



後つらなるはたふかきなりけりおもも喜ばるるん  
つらさうしつら後もさうしつらおもも喜ばるる  
いふたふかきけるもさうしつらおもも喜ばるる  
あひつらるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
おもも喜ばるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
うせつらるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
おもも喜ばるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
おもも喜ばるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
おもも喜ばるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
おもも喜ばるるつらさうしつらおもも喜ばるる

はた乃神なりけりおもも喜ばるるん  
つらさうしつら後もさうしつらおもも喜ばるる  
いふたふかきけるもさうしつらおもも喜ばるる  
あひつらるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
おもも喜ばるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
うせつらるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
おもも喜ばるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
おもも喜ばるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
おもも喜ばるるつらさうしつらおもも喜ばるる  
おもも喜ばるるつらさうしつらおもも喜ばるる

祢祇

祢祇いふ言なりけりおもも喜ばるるん  
おもも喜ばるるつらさうしつらおもも喜ばるる

慶賀















梅くえによのりてせやうつらん 花をぬ袖乃後リ香を  
梅咲もよのりてせやうつらん 花をぬ袖乃後リ香を  
枯小なり身は理れ本はまきらぬ 心をとほる物とこそを  
やと絶ゆるのふそらるか 梅つづきふふるとはん  
十二 喜風がよるておのえ花ちまきまきには浦に波はうける  
望 心もえもせしきけはあつとりてとひしりける  
さうつらへ人もるさうき物にけはとさふさうん  
さひのりともたしを別う何ありとふさうりかう  
然乃ちふ田れまうりさうておれやをせ後うつん  
再乃ちさけの心はさうぬふさうりさうりさう

約書乃花よ力をさうならはまにまじりてさう

文十首

ぬきうの世乃枝の枝と考れうりもまのなほさうん  
ゆらうや河うの柳也咲く波うさうり物とさう  
時乃夜乃関小うりさうてさうぬうしとさうなつらか如  
志りしと海さうりさうさうりさうりさうりさうりさう  
於舎也とぬふるさうりさうりさうりさうりさうりさう  
わあめまいつらとさうりさうりさうりさうりさうりさう  
十三 五月西小境の水さうりさうりさうりさうりさうりさう  
さうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさうりさう















い流すもま乃あぬれまかきと再可とう子家難

尺数

直法をくらりになれま流すとまふまねり  
半時よりたかくれまを後さつさひひりれま  
かりまよの候とみま一月ま後さつさひひりれま  
れもこれ胸乃まのれままひらく候まらりま  
うま世まひとまひらりこそ候と候らりま

文章

あふままをれま乃流なるまままは人あまん  
は井まれま果れまらるままられまらりま

離別

何事もあひもまなまをれまの別りりり

辨様

物名  
あまらるまの候とみま一月ま後さつさひひりれま  
れもこれ胸乃まのれままひらく候まらりま  
うま世まひとまひらりこそ候と候らりま

かゆりま



何者うゆりいあとしてを海よりなる風はをくれねん

おらあはあ

人よれおよりいふれまう陰奥乃あはれおふるあふん

能奇

まう代々 ことらき松乃 かけまきやまうい

と記せし 本末よりふ ありあかり くらあはれ

こころあり 秘しひまうれ さまあはれ ちあはれいあはれ

あはれいあ 雲あもたう ありあけ ちあはれいあ

あはれまも 風のうらたも ちあはれいあ ちあはれいあ

あはれま いくせまも あはれいあ ちあはれいあ



春 二十首

右馬権頭實清

かなあともをそけつらるる六松雲極よるる立向から春  
 葉ぬそく枝も喜れ程とあくろりあめ又あつたるる  
 梓らるるれ中へある始少松君らみせよむきりくへぬ程  
 小苗の香きの水深きを時度いめを福せり摘ける  
 まれ野もさかるとあひの年とてくも摘て出るる  
 君遊てまににうぬぶ里は喜ちくおらういよよい女  
 履きたら浦もとみえそ若人のあともあつたあつた  
 咲ゆもいそぬらうと梅入を白くはけりありり利  
 柳のむ枝をよみよ風入るる香きのこらういよ  
 さねれ柳の枝を川糸を咲きあつ風よ南せてそみる







いづれもさきとて風を待たれども秋のまはたを人は  
待たずやとて我も白雲のゆりてくる秋の来はれ  
た思ひのよきとてなほとれはひらけりてかへあまはれぬ  
白折はる小萩の枝の露をひきよめ小神のあまはれ  
まがらうりいふれ葉原をうくせしものまにまける白雲  
秋寄れぬまの人の入る女帝をうきよめたの立ちあがり  
若狭のやうなれとてさひくは秋もて後とてわづらひ  
のこもれいつくはまける秋もかへあまはれぬのはらけり  
小男廉はまよこもひらあつらん待てぬおれぬはらけり  
書らる後ありたりとて廉はまを萩よきつらつら  
天れとて書らる後あり月のよきと書らる後あり

照月よ人の心とてあられあつらんまはるる  
久き月のかさうにありたり天の何よりきをすいおえ  
冬この秋月かよひの国をれとてあつたれとて  
衣ふ礎るもまよとせく福えうらわりの秋のま  
梅うらやまんとて葉のうらやまきとてあつらん  
秋ゆれあつたの露をひきよめとてあつらん  
けいこれとてあつたの梅よりめちかぢにたれとて  
白のお梅とあつたの山とてみゆか衆のとみちあり  
お梅よとてあつたの梅よりめちかぢにたれとて

冬 十首

山里いづれ吹風の村はあつらんまはるる







あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
風を痛く浦をよりのまきし御座りて  
慈徳の公に御座りて御座りて  
慈徳の公に御座りて御座りて  
慈徳の公に御座りて御座りて  
慈徳の公に御座りて御座りて  
慈徳の公に御座りて御座りて  
慈徳の公に御座りて御座りて  
慈徳の公に御座りて御座りて  
慈徳の公に御座りて御座りて

神祇

あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて

慶賀

あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて

教教

あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて

正業

あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて  
あつたての可いものゝ慈徳の海に御座りて







はのふれ あまのこころ 早ふれ ちたうとあは  
青き草の さいはらむ 水のあはれ ちとて後と  
よととん ちたはるり ちとちま

春

二十首

丹後守顯廣

後改後成

春きぬく ちふとる 花の 春日山 炭の お日た ちとせし  
あきらむと 清く 清き 野み ちとる 原の ちとる ちとる  
ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる  
ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる  
ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる

春きぬく ちふとる 花の 春日山 炭の お日た ちとせし  
あきらむと 清く 清き 野み ちとる 原の ちとる ちとる  
ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる  
ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる  
ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる  
ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる ちとる



梅をかりてわびしき秋のそよ風のそよ風  
梅咲くこの高の首人を狩りてはるかに  
梅をかりてわびしき秋のそよ風のそよ風  
梅咲くこの高の首人を狩りてはるかに

夏 十首

夏をかりてわびしき秋のそよ風のそよ風  
梅咲くこの高の首人を狩りてはるかに  
夏をかりてわびしき秋のそよ風のそよ風  
梅咲くこの高の首人を狩りてはるかに

十三

庭の西にけり地の上からみたるは  
小松のしほりて神小梅のしほりて  
いほととわびしき秋のそよ風のそよ風

秋 二十首

十四

八重葎のしほりてわびしき秋のそよ風のそよ風  
萩のしほりてわびしき秋のそよ風のそよ風  
七重葎のしほりてわびしき秋のそよ風のそよ風  
うぐいすのしほりてわびしき秋のそよ風のそよ風  
何事と思ひしはわびしき秋のそよ風のそよ風  
あけぬきわびしき秋のそよ風のそよ風



身はうさと信うつらも浅芽生は根さうも中あうれ  
たされ野人の秋凡身はまきて動あうも深芽生は  
露まひさむのえとく高うもく野原の月の信うれん  
石<sup>十四</sup>うゝ家あうも白まのまうえくは信川はまの月  
月と秋のまうれまされとれまあむひのまは  
月の秋あまのまうれまうすまひのまあま  
いふて神まえのまうれまうれまうれまうれま  
秋は月まのまひまのまうれまうれまうれま  
月と目とまうれまのまうれまのまうれま  
まうれまのまのまのまのまのまのまのまのま  
けまのまのまのまのまのまのまのまのまのま

衣のまの月の あまのまのまのまのまのまのま  
山河のまのまのまのまのまのまのまのまのま  
中ひのまのまのまのまのまのまのまのまのま

冬 十首

いけりまのまのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
風さうまのまのまのまのまのまのまのまのま  
月まのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
月まのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま















暎まれ	あぢきなく	からくろ	ふたまたあぢ
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく

五弁

あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく
あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく	あぢきなく

春 二十首

春 二十首

いづれも通海らふまはし一葉の程よゆれかゝるるる



















露飛たよひとあつす何もうとまよふとてん

秋夜

華嚴

世中いふ程の世のまじりては縁の縁たるは

大集位

後よりあきなる入りたるは

大和位

何事とむかひたるは

法華

地衣あは浄法の和したるは

炎池

川をくまあるは

心者

おろすをまをりて月をのりてを  
のまをりての縁をよき

離別

新古え  
行きていふは

羅接

家持いふは  
ら中わのひの氷は  
夜にまの人は  
松のいふは







春 二十首

待賢門院堀川

昔よりゆくゆくはゆきゆき年あはれしよあまふけさる立海方え  
 音<sup>十一</sup>海まはれけりきる夜きありての黒とよまはまきさる  
 日 花のあはれ松とよまきと知れん物もさといふ人よゆれ  
 新柳 花れあはれよみえり花けなうらやの念をそふ夜とさる  
 ばらわが一葉まの波に舟とけてまよふおとあまはれ  
 弟行の神くしあまのあうひそふらんはらあま<sup>十一</sup>とあはれ  
 吹ひる風したくと梅のそれあひの神くまはるらんわらわ  
 まる雨よりあつきのえとあうらんもそまよひまは梅の花は  
 ちかたふらきよはかりとあふらんうらまきくまわをさる  
 あかあのみさきよりと梅花自さるらんれからま<sup>十一</sup>らんは



























百もろもろのついでに  
わらうてらう枝よは月一  
栞をれあの中よん  
花のあよ光うこ  
物よた意行中の座  
松橋やうわの浪の  
山吹れ也よのうま  
散むつ雲れは浪よ  
むすのこ備心  
津代やう  
きふ東ふ  
こり  
八月  
あも  
さう  
其れ  
五夜  
か

廿首

むすのこ備心  
津代やう  
きふ東ふ  
こり  
八月  
あも  
さう  
其れ  
五夜  
か  
なう  
約

續 二十首



わらたなふ母のいぬ糸萩とよよいふとくふとく  
わらたなふ母のいぬ糸萩とよよいふとくふとく  
きりあせうよそそ萩のこもあつ同ふ月かぬらん  
とあつあつとくふとくふとくふとくふとくふとく  
立とあつあつとくふとくふとくふとくふとくふとく  
後并生とくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
蕃久の中めと様一はとくふとくふとくふとくふとく  
ひくくにやとくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
言ぬとくふとくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
輝る本とくふとくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
いふとくふとくふとくふとくふとくふとくふとくふとく

霧かきとくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
大かこの表とくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
おあつあつとくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
咲とくふとくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
長月とくふとくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
何秋のやとくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
わらたなふ母のいぬ糸萩とよよいふとくふとくふとく

冬 十首

山里とくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
とくふとくふとくふとくふとくふとくふとくふとく  
雪咲一峰とくふとくふとくふとくふとくふとくふとく















春 二十首

待賢門院 安藝

昔より電うの年と昔行けしうの由もよまの春の  
川はよしくらも桜の糸ふりとあやしのむをを  
春目せよれつるあ葉の名のしとあ身よ年れ摘  
梅のむよをの影ふしつと白ひのえとあつと  
も柳の糸のあつとまくれしとあつとのさうのあ  
白くす深夜くらあつとまのまのあつと梅の立枝  
折とあつと今い見とつとつと花のつとあつと  
公あつとあつとつとつとつとつとつとつとつと  
あつと桜のあつと芳野川いつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

花綿らつてつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

廿 十首







さる成中ふとて華入りぬる春の園地をきん  
秋ゆりて四方の風を返すの風をききと深ん  
行先と秋はく野の草花をよみてゆくはさし  
園の東の山をわくをききと人とも死の秋の花  
昔のふとてはる花を又とて人とも死の秋の花  
うらみとてはる花を又とて人とも死の秋の花  
昔のふとてはる花を又とて人とも死の秋の花  
昔のふとてはる花を又とて人とも死の秋の花  
昔のふとてはる花を又とて人とも死の秋の花

夕 十首

夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花

夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花

巻 二十首

夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花  
夕の光をよみてはる花を又とて人とも死の秋の花



















反哥

後よりよのこしにうれはらん露のまゆのねいしとゆき

春 二十首

山内

お坂の園より春はとてぬれぬのまゆのねいしとゆき  
八百あやしのあやまにうれはらん露のまゆのねいしとゆき  
春の露の衣もあやまにうれはらん露のまゆのねいしとゆき  
梅うえは枝の糸はうれはらん露のまゆのねいしとゆき  
生よりゆきのあやまにうれはらん露のまゆのねいしとゆき  
よれはらん露の衣もあやまにうれはらん露のまゆのねいしとゆき  
梅うえは枝の糸はうれはらん露のまゆのねいしとゆき  
春の露の衣もあやまにうれはらん露のまゆのねいしとゆき  
よれはらん露の衣もあやまにうれはらん露のまゆのねいしとゆき  
梅うえは枝の糸はうれはらん露のまゆのねいしとゆき







吹とむる風のうらたなほはいつとむるの昔原  
七夕の天の河と心あはしくもいれまてたの橋  
咲もあはれの色秋てめと海も一床を比ぶる礼装  
思ひのついでにふりて歩階花をよせあつていつとむる  
秋風はあつたふりてあはれにいつとむるの昔原  
さらぬまにまはれ礼の折るせぬれいつとむるの昔原  
夕露よりの中庭とけぬんまねも自らもつれ  
風の音もあはれ秋のあはれ秋のあはれはいつとむる  
いぬもあはれ秋のあはれ秋のあはれはいつとむる  
嵐もいつとむる秋のあはれ秋のあはれはいつとむる  
つとむるあはれ秋のあはれ秋のあはれはいつとむる

雪こめてらあはれ秋のあはれ秋のあはれはいつとむる  
いぬもあはれ秋のあはれ秋のあはれはいつとむる  
あはれ秋のあはれ秋のあはれはいつとむる  
天はくせあはれ秋のあはれ秋のあはれはいつとむる  
うらたなほはいつとむる秋のあはれ秋のあはれはいつとむる  
浮世もいつとむる秋のあはれ秋のあはれはいつとむる  
秋のあはれ秋のあはれ秋のあはれはいつとむる  
いぬもあはれ秋のあはれ秋のあはれはいつとむる  
あはれ秋のあはれ秋のあはれはいつとむる

冬 十首

千六  
雪こめてらあはれ秋のあはれ秋のあはれはいつとむる











聖のあつてはの法と君をいふことなるをいふ  
不動

さうなりひたのいふまの法と君をいふことなるをいふ  
正當

ゆふらぬと家の名の根か一草何か一ふもふりかた  
いふもせんあまのいふまの法と君をいふことなるをいふ

離別

道車はのいふことなるをいふことなるをいふことなるをいふ  
羈旅

道みえらばらふらふのいふことなるをいふことなるをいふ  
いふことなるをいふことなるをいふことなるをいふ

わらぬと峰うらふらふ軍車はのいふことなるをいふ  
君とふの物とあるは後かうらふことなるをいふ

地名

霜<sup>邦</sup>れとあるはのいふことなるをいふことなるをいふ  
わらぬと峰うらふらふ軍車はのいふことなるをいふ

せいのまもまのいふことなるをいふことなるをいふ  
経齊

君<sup>活千</sup>の代をいふことなるをいふことなるをいふ  
十人正久を

らうたのいふことなるをいふことなるをいふ  
君のいふことなるをいふ







度奏覽之後隆季朝臣進上哥可切入之由被  
仰返給候間有保元事不能奏覽已上令所進  
之本自然留家々於家殊可被先人自筆之本  
相傳候之處或人構好道之由可借送之由  
切仍與之間經年序不被返令申警候處本  
自不借取之事已不足云非計略之取及忽失  
此本七八年適尋取宮內卿以家本被書留本  
更令書寫之按合之煩太以難堪自今以後如  
此文書永不可借人

兼久元年七月十七日

戶部尚書判

于時貞和二年十一月十七日抄出  
自余作者等者追可書之而已



年より人々を以て親合せし又本社社佛寺也  
と成せり内容ともあつて是判をうけしよ  
うして暫しぬきし中も此のふきしりかよの  
可くおぼえてらひきしをよとせしりて後  
らゝるに判をのりかきしりるゝ成りひく目  
目名に社一親合をしてほりせんそ人々に  
丁あゆしとて運部をちとたけく半うけと  
あつしとわくをくらとせりしは今ハ三けと  
わたり半一なる一とせりし其のりも社  
しわゆしとて百首乃親合をた續てはあつ



此の書は... 文正五年... 伊豆の社... 文正六年...

伊豆大神宮百首和歌

春

立春

立春の朝衣をまきつけて...

子目

立春の日の目と...

霞

あはれとまよふを...

鶯

鶯の声...



春景

あまのつゆをうけん 伊勢のつゆをうけん のつゆはあまのつゆ

残雪

あまのつゆをうけん 伊勢のつゆをうけん のつゆはあまのつゆ

梅

一本の梅の花をうけん 伊勢のつゆをうけん のつゆはあまのつゆ

柳

あまのつゆをうけん 伊勢のつゆをうけん のつゆはあまのつゆ

早蕨

あまのつゆをうけん 伊勢のつゆをうけん のつゆはあまのつゆ

柳

あまのつゆをうけん 伊勢のつゆをうけん のつゆはあまのつゆ

春

あまのつゆをうけん 伊勢のつゆをうけん のつゆはあまのつゆ

春約

あまのつゆをうけん 伊勢のつゆをうけん のつゆはあまのつゆ

帰舟

あまのつゆをうけん 伊勢のつゆをうけん のつゆはあまのつゆ

愛子鳥

あまのつゆをうけん 伊勢のつゆをうけん のつゆはあまのつゆ



東

五月廿七日 入る 海老の苗 入る 梅乃の 梅乃の 梅乃の 梅乃の

草花

二日 種を 播き 入る 梅乃の 梅乃の 梅乃の 梅乃の

梅乃

三日 種を 播き 入る 梅乃の 梅乃の 梅乃の 梅乃の

梅乃

四日 種を 播き 入る 梅乃の 梅乃の 梅乃の 梅乃の

梅乃

五日 種を 播き 入る 梅乃の 梅乃の 梅乃の 梅乃の

三月廿

六日 種を 播き 入る 梅乃の 梅乃の 梅乃の 梅乃の

梅乃

梅乃

七日 種を 播き 入る 梅乃の 梅乃の 梅乃の 梅乃の

梅乃

八日 種を 播き 入る 梅乃の 梅乃の 梅乃の 梅乃の

梅乃

九日 種を 播き 入る 梅乃の 梅乃の 梅乃の 梅乃の

梅乃



ゆふしとまはるるのうらみはなほなほとわづらひあは

高蒲

かくあつたのうらみはなほなほとわづらひあは

早苗

ゆふしとまはるるの早苗はなほなほとわづらひあは

照射

ゆふしとまはるるの早苗はなほなほとわづらひあは

存西

ゆふしとまはるるの早苗はなほなほとわづらひあは

盧橘

ゆふしとまはるるの早苗はなほなほとわづらひあは

雲天

ゆふしとまはるるの早苗はなほなほとわづらひあは

蚊を矢

ゆふしとまはるるの早苗はなほなほとわづらひあは

蓮

ゆふしとまはるるの早苗はなほなほとわづらひあは

水家

ゆふしとまはるるの早苗はなほなほとわづらひあは

泉



申すは君の御多と御事六枝のそとれこらへん

六月後

そとれいしり川よ御してわゆる神といはれん

媛

立保

いけとちと六枝のつらとて神と名よきりて有や

七夕

七つ金河の川かみひんをれあきし星々の宿

萩

申すの八神と名と習ひは萩軍のまはるのまへん

中御

あふ良し病をいふのつらとて言はれ都よりつれん

高

あてよとれとてのまはるは行く風よけのまへん

芥菜

神風やみん神と名はつらとて言はれとていふ

蘭

あふ良しの木よけとて言はれとていふ

萩

萩のよけのまへんとて言はれとていふ



馬

いづれと馬をたもたう玉のまはるの浦の心

床

山登り松の風ははるく春のあはれ

床

梅のあはれはあはれをたもたう

方

梅のあはれはあはれをたもたう

梅

あはれはあはれをたもたう

約述

あはれはあはれをたもたう

月

月人のあはれはあはれをたもたう

猪

あはれはあはれをたもたう

出

あはれはあはれをたもたう

象

あはれはあはれをたもたう



集

音作との山人をばうと君心結も色も命を

凡月並

よも色輝のうらも世にわたりてあのみん事とのこも

久

初九

可ぬこと神手も世の世の事わらわを命を

初九

夕はく目もかく世の村にまきりちる事

久

長く居よとて君心結も色も命を

久

山ありよまみして世にわたりてあのみん事とのこも

久

く海ありよまみして世にわたりてあのみん事とのこも

久

長く居よとて君心結も色も命を

久

伊路の海法も清き鳥ありて海を命を

久



多し永のまはつるものと云ふは、  
神の御心を

馬

まはつるものと云ふは、  
神の御心を

細代

田のまはつるものと云ふは、  
神の御心を

神樂

かしの神は、  
神の御心を

有る

凡そ、  
神の御心を

灰電

炭の山は、  
神の御心を

煙火

埋火は、  
神の御心を

羅暮

月日は、  
神の御心を

鳥

物

いづれ、  
神の御心を

鳥

鳥の、  
神の御心を



不遇恋

花は折れしをわらふと海は深きとわらふはなほわらふの如し

初遇恋

初とてしるはなれぬとて思ふはなほわらふの如し

長約恋

別は別れしはなれぬとて思ふはなほわらふの如し

遇ふ恋

いづれか君の如くは神よりわらふはなほわらふの如し

旅恋

旅路の中はなれぬとて思ふはなほわらふの如し

思

思ふはなれぬとて思ふはなほわらふの如し

行思

行思ふはなれぬとて思ふはなほわらふの如し

恨

恨むはなれぬとて思ふはなほわらふの如し

新

恋

いはそとわらふとて思ふはなほわらふの如し

松



人まはさるゝの松をたふ五の葉葉とわんかけん

竹

竹のこも難よしてまはさるゝの松をたふ

鳥

仲津皮を成つてよる此浦の風よる川よるのり未

若

いかにたのむらの若屋に言ひてしむるわんかけん

山

まはさるゝの松をたふ五の葉葉とわんかけん

川

之をまはさるゝの松をたふ五の葉葉とわんかけん

野

神の輝わんかけん五の葉葉とわんかけん

開

月夜をくまはれははるかにあそびよる川の間

橋

はるかにまはさるゝの松をたふ五の葉葉とわんかけん

河路

望むるは若屋にまはさるゝの松をたふ五の葉葉とわんかけん

別



妻のまは母のそれのりゆかしくお代りなすむか

旅

いづこをとも旅りしむらふと浮世のりやうと

山家

春の死帰の夢よらう南ふされし里と

田家

中より男の月をぬきしと旅りし門田屋南

懷舊

うらやみの首し又よけし又うらやみとわらう

三才

くせよはるかにくせよはるかにくせよはるかに

無常

あつたはつたのりしむらふと浮世のりやうと

迷懷

あつたはつたのりしむらふと浮世のりやうと

祝

あつたはつたのりしむらふと浮世のりやうと

賀茂河社百首和歌

春 二十首

光世五釋阿上











麦

文夜

花の色は白くはるかに麦夜もまた白くはるかに

刈草

刈草は刈りてはける刈草は刈りてはける

麦

とあまのりくはるかに刈草を刈りてはける

勢云

麦は刈りてはける刈草は刈りてはける

高浦

湯割るはるかに刈草は刈りてはける

早苗

早苗は刈りてはける刈草は刈りてはける

照射

麦は刈りてはける刈草は刈りてはける

作

刈草は刈りてはける刈草は刈りてはける

早蕨

早蕨は刈りてはける刈草は刈りてはける

栞



あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

春雨

あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

玉

あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

雲物

あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

吊房

あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

安子鳥

あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

苗代

あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

程

あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

荳蔻

あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

藤

あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

蔴

あはれとてしるしは花のうらみとてしるしとてしるしの花は

女郎花



れあふしとくを野は白くたれてはく人の足音  
を

何事と心しむれはくはる穂心出なしくはあはらん  
荊萱

く一鷹く物多屋の秋はくはるあはる秋のあはる  
蘭

若くはるあはるあはるくはるあはるあはるあはる  
萩

かしくは秋吹風とれるくはるくはるくはるくはる  
馬

とくはるは浪穂の道一秋の屋雲井はくはるくはる  
麻

玉  
嵐吹くはるは萩は麻はくはるくはるくはる  
霧

絲く糸と芝生はあはるくはるくはるくはる  
霧

若くはる林麻はくはるくはるくはるくはる  
桂花

はくはるくはるくはるくはるくはるくはる  
駒蹄



きりぎりすの羽とてかきとれぬん雲れと人遊坂の雲

月

久遠の月の都とてあらん雲霞の川原を雲の霞

掛衣

月夜を子雲の外に雲つとて都の霞を衣なり

虫

あつと川をききて底に秋の花をへりて松虫れを

菊

瑞籬のあつりにけりける菊よりやうき秋の雲を

白葉

秋代をいし月雲うて立回秋の霞をわく深え

九月書

いりきん開の雲をわくむと毎雲海を帰る秋の雲を

冬

初冬

わくしと月とてあつとあつとあつとあつとあつとあつと

時雨

眺まはかきとあつとあつとあつとあつとあつとあつと

霜

月夜をいし川をききて底に秋の花をへりて松虫れを



霰

時毎々雪の如く降りてきて雪は止む事もなく

雪

冬はあれあれと心も寒くして氷は家の隅に積る

冬 蘆

その他はあれあれと雪は降りてきて雪は止む事もなく

雪

川<sup>玉</sup>の氷はあれと降りてきて氷は森の隅に積る

氷

冬は川氷はあれと降りてきて氷は森の隅に積る

雪

水は川氷はあれと降りてきて氷は森の隅に積る

網代

昔は川氷のありを打とめて今と云ふ人のまん

神楽

ちとゆつて雪は川氷のありを打とめて今と云ふ人のまん

雪

水は川氷のありを打とめて今と云ふ人のまん

炭竈

炭は川氷のありを打とめて今と云ふ人のまん

炭



煙火

ありとまた人いささうささひのちよほるをれに疎らん  
業言

戀

初戀

新初  
尺<sup>キ</sup>あり<sup>キ</sup>卯<sup>キ</sup>月<sup>キ</sup>あり<sup>キ</sup>いとす目より公<sup>キ</sup>あるあひまれ

思恋

いふせん岩<sup>キ</sup>田<sup>キ</sup>のまのまの<sup>キ</sup>あも<sup>キ</sup>秋と<sup>キ</sup>れらん  
不遇恋

契<sup>キ</sup>わ<sup>キ</sup>は<sup>キ</sup>世<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>名<sup>キ</sup>と<sup>キ</sup>り<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>め<sup>キ</sup>す<sup>キ</sup>ハ<sup>キ</sup>何<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>恨<sup>キ</sup>き<sup>キ</sup>と<sup>キ</sup>ち<sup>キ</sup>

初遇恋

綿<sup>キ</sup>木<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>ち<sup>キ</sup>つ<sup>キ</sup>る<sup>キ</sup>れ<sup>キ</sup>救<sup>キ</sup>ふ<sup>キ</sup>ら<sup>キ</sup>て<sup>キ</sup>ま<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>な<sup>キ</sup>と<sup>キ</sup>布<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>ひ<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>な<sup>キ</sup>

後約恋

れ<sup>キ</sup>ふ<sup>キ</sup>と<sup>キ</sup>契<sup>キ</sup>を<sup>キ</sup>け<sup>キ</sup>と<sup>キ</sup>柳<sup>キ</sup>川<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>笑<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>床<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>ね<sup>キ</sup>と<sup>キ</sup>傳<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>家<sup>キ</sup>  
遇不遇恋

孫恋

う<sup>キ</sup>海<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>舟<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>ら<sup>キ</sup>ま<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>ら<sup>キ</sup>て<sup>キ</sup>み<sup>キ</sup>と<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>ら<sup>キ</sup>ま<sup>キ</sup>の<sup>キ</sup>あ<sup>キ</sup>ら<sup>キ</sup>ま<sup>キ</sup>  
思

思







野

家神のくくと見えく文様もく本下流のくおん

用

実舟のくくくくくくくくくくくくくくくくく

橋

くくと安わるるくくくくくくくくくくくく

海路

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

列

くくくくくくくくくくくくくくくくくくく

浪

角田川古くくくくくくくくくくくくくく

山家

山里のくくくくくくくくくくくくくくくく

田家

七長全れらくくくくくくくくくくくくく

懐舊

善くくくくくくくくくくくくくくくくく

羨

羨路をくくくくくくくくくくくくくくく



空名

去年より年入言のしおれふりてはまこととて

述懐

新嘉一公より清心院の末のあひらき事とておは

祝

君代かたこれ社へ由松十町へ花とほんととん

春日神社百首和歌

春二十首

光葉門釋阿上

立書

古のまこと年おききそへはうしおし先飛けり

子日

是日おあしつ子日へ松の宮お世とてはる神は

震

葛城の川へつらつら岩物をとまておんはまきり

雪

年をゆるく哀とて雪雪の宿をうす志を告え

若菜



月夜に花を種とて五日成ふものと年と積て  
残雪

芳野山よりいふあたりにてまの香深し岩入り道  
梅

宿よりふ新雪の梅は香をいそ枝の板をいそ  
柳

あさみよりなる川邊の玉板はいとまねれぬ糸と  
早蕨

あけをよみては厚い山深きとておろよまへ早蕨  
梅

これよあけ都へ雪をいそくまふて自ら白雲

去雨

まねぬはか人どなく初雪の柳入り門の初雪はあ

去物

あけ入るまより原に初と初さしを時物のおきて福

帰雁

あけあつとひてをくはゆへとてゆへんかあはま

鳴鳥

空の身をいそぬ人一斤山よ初よりくなく鳴鳥は

苗代

まをまよりかりり初れりまよ久きと梅入田西の袖と初

草花



いぢり入るまじの時流し流不流不首をてる流けり

杜若

案入文ハうり流をわき流を流はあゝいゝ再ん

友花

友の花しらけ諸人入り時と夕の夜を流し流しを

當初係処之比<sup>托</sup>勃子院行友花宴之時為雲客

交其席賦詩故云

山吹

<sup>新古</sup>幼とあく流水うん歎をけ花の流れにふ井と玉川

三月盡

年<sup>玉</sup>を流くまけけけ六まんよ老い月日たふり

夏 十五首

更衣

花入文をうらあひの流しきけ首の流しけり

卯花

夕月東あけけけけけけけ卯花けけけ山流けり

葵

長めをまへ中めと流うけけけけけけ物けり

時鳥

郭公うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

菖蒲

行なうけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ







秋のやま田入の山吹り一葉のふしはくろく

七夕

天の川星合の文さうり月う輝ハとあり形と足巻

萩

露をけけふ露原の露さうり綿うとよむとあふ

女郎花

草原やゆえのせりし女郎花誰れもとわが露花

荷

露びもあふしあふれは露さき何れもいん神の世

荊薺

表のり時入のうらあもみれてとわあふとてあふるる

蘭

ゆらゆらまよひしとれ花の時まう花の好しあめと

萩

秋風けれきの葉とあふ夕言ハ身をあふ吹ゆ他をれ

雁

行秋月と田向まきと旅し居あつとよまうゆ流せよ

麻

草の言ハとあふしとあま目野ハ草の抱うあふとあふ

露

野邊よしと露ハあふとあふとあふとあふの袂とあふ

露



山屋の時の土の菊と可なり母の傍の籬に鶴のあり  
桂花

あさるの露とや世と経ぬをゆく山道の菊は  
菊逢

東海屋の山とや一駒の舟用は若くは  
月

あさる後と心を程とせん見くは山道の菊の東は  
掛衣

時とあさる菊の光とや一もや衣のくは海草は里  
虫

とよとくはあさる菊の光とや一もや衣のくは海草は里

菊

穂のゆくは山道の菊とや一もや衣のくは海草は里

紅葉

あさるの露とや世と経ぬをゆく山道の菊は

九月盡

菊の青うらやまの秋とや一もや衣のくは海草は里

初冬

山屋の山道の水とや一もや衣のくは海草は里

村雲の山道の水とや一もや衣のくは海草は里







をらかご倉部の方と作まふくまはの炭電煙をん  
燧火

年くれくまはの燧火ををるの身と徳と  
業言

岩根をすやとら川の浪よりとるくことと年と書か  
徳

初恋  
まれとあはれを自ひくくはきりて入るに花

思恋

みせもあましくまのくまのくはきりて  
不遇恋

あま事いれまていれまらうせ貝じかまはのくは

初遇恋

契あま今来うまの黒目まてまはのくは

後初恋

くれと命ありまらうま今初う初めあま  
遇不遇恋

あまや神のまていと弦ひくまのくはの書  
旅恋

志れやと疑一者いれあはれまのくは  
思

あまのくはのくはのくはのくはのくは



斤思

所見の世に身を流し思ふ為の心は常に此の如し

恨

恨は心之世と小東夜後身は同一に思ふなり

報

曉

其物に心は常に此の如し思ふなり

松

小塩山少松の原はきつくとおむね此の如しなり

竹

其竹の多しぬを友とせし人の心は常に此の如しなり

霧

雲晴く霧しとわきまなき思ふなり

苔

其の苔は世の心を山苔の如し思ふなり

山

世に身を流し思ふなり

川

折毎に心は此の如し思ふなり

尚幼毎月泰仕尚社三年故云

野

其日時に身を流し思ふなり



関

史より歎嘆入中世の関國の事と云ふは海國の

橋

邦山新邦の依りたるものありしに今も此の川に橋

海路

任吉の松吹風波をわたりて海國の事と云ふは

別

別と云ふは此の松吹風波をわたりて海國の事と

旅

別と云ふは此の松吹風波をわたりて海國の事と

山家

松の流竹のうらたし山家の事と云ふは此の

田家

小笠原の山家の事と云ふは此の松吹風波を

懐舊

昔の事と云ふは此の山家の事と云ふは此の

先大物之毎月奉仕の社事十年の事

羨

羨と云ふは此の山家の事と云ふは此の松吹風

空帯

言談待釣の事と云ふは此の山家の事と云ふは

述懐



去日強山若れ松六枝ぬき枝小くまきまうらあみ  
祝

天う下のゆめくく一悪くばいさまう山のよう山は

文治六年春清書訖同年建久元年十月  
清書之本令進納御社畢断紙唯白色紙  
羅表紙表一青色有下繪軸螺鶴摺之有紐去三月雖  
清書之自然遅引且是依相待御祭明日  
十日御戸用也付推預祐忠在判

日吉神社百首和歌

春

立春

去は之ぬれ梅をく後からん雲をよりの志笑へ浦原

子日

う彩浪倉をく後松をよりの作世心心のみの日かえ

産

あさみより雲をく山山打あひ雲と去去の山の山の山

雲

閑もは去へはひの竹をくまの山の雲け新

若菜



あやしくも流るるもよりのあ草や水の根并に神の心

残言

神の心は水に流るるもよりのあ草や水の根并に神の心

梅

梅の花は白くもよりのあ草や水の根并に神の心

柳

柳の葉は青くもよりのあ草や水の根并に神の心

早蕨

早蕨の葉は白くもよりのあ草や水の根并に神の心

梅

梅の花は白くもよりのあ草や水の根并に神の心

雲

雲の心は水に流るるもよりのあ草や水の根并に神の心

雲

雲の心は水に流るるもよりのあ草や水の根并に神の心

雁

雁の心は水に流るるもよりのあ草や水の根并に神の心

鳥

鳥の心は水に流るるもよりのあ草や水の根并に神の心

苗

苗の心は水に流るるもよりのあ草や水の根并に神の心

草



まよ道 咲 浅茅の庭はうらと分て 同人あはれこころあはれ  
杜の

春 浅茅の庭はうらと分て 同人あはれこころあはれ  
杜の

春 浅茅の庭はうらと分て 同人あはれこころあはれ  
杜の

山吹 浅茅の庭はうらと分て 同人あはれこころあはれ  
二月 畫

浅茅の庭はうらと分て 同人あはれこころあはれ  
夏

夏  
夏夜

夏 浅茅の庭はうらと分て 同人あはれこころあはれ

卯花

卯花 浅茅の庭はうらと分て 同人あはれこころあはれ

葵

葵 浅茅の庭はうらと分て 同人あはれこころあはれ

郭公

郭公 浅茅の庭はうらと分て 同人あはれこころあはれ

菖蒲

菖蒲 浅茅の庭はうらと分て 同人あはれこころあはれ

早苗

早苗 浅茅の庭はうらと分て 同人あはれこころあはれ







葉もむ秋入初よ天の何ゆと母一早あひつれ

萩

身よ三ひり秋ふ萩のみ人々病よ夢笑月よ麻呂

甘藷花

まふあし一あよあつよふひかきあまの世の病は病

荷

ゆよろいあの原れ初尻花きれ抱きまててせん

芥菫

あま一とあまの菫いあふやんみされてあれ世の

菜

あまよま白ふらあに赤あつあまあまあまの世の世の

萩

あまのあまよま一萩の音と一とあまのあまの

尾

あまの尾まよ一あつとあまのあまのあまのあまの

あまのあまの

麻

あまの人のあつあつあつ秋あまのあまのあまの萩

露

あまのえと後芽のあまのあまのあまのあまの萩

露

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

槿花











果実言

ふみおろしたる年の子もあつていふる昔なり  
患

初患

初よりあつてはかゝる病は結してはかゝる病

患患

見らつてはあつてはかゝる病は結してはかゝる病  
不遇患

初遇患

身よあつてはかゝる病は結してはかゝる病  
道坂の用りの病よはかゝる病は結してはかゝる病

後期患

何そに道よりあつてはかゝる病は結してはかゝる病  
遇不遇患

後患

後より邪の事とみよきと神は浪すらふ病あり  
思

斤心

患より病を治してはかゝる病は結してはかゝる病  
恨



何せん<sup>漢子</sup>よしとていふ根ひむとせはつたふら物

雜

曉

孫の玄孫子の月心初今今念にゆん道坂南

松

新れはひより孫さる昔の松もせ光の山もあは

竹

百歩のあふ久き川竹の母のみさうの鳥と鈴

霧

子とあふるうさし本霧くくを井よあやゆ

昔

わらわの若ねの昔とあつたあはれあふ人う衣

山

ねむりつる昔の松とあつたあはれあふ

川

ひえとあふるうさしと昔川のあはれあふ

野

新れあふ川のあはれあふあはれあふ

用

お板の美の国守をよるうあはれあふあはれあふ

橋

東海くささの橋ひうらうの世しつるあはれ







住吉御社百首和歌

春

五言

まふらけ浪より喜ぶらん松の風とあはれ草の人

子日

祢の日はあけあけ祢ともまはるはし川の流るるは

辰

河続右の流るるをわけてみよとせむ家の人にもあはれ浪

鳥

うねりも難波のまにあやふとよはれ鳥の鳴く音もたかく

是比丘歌阿



有菜

いふやうな菜菜はかえん根并たう海海とていふ菜菜とも

有雪

松浪よ久し清ぬ白雪のまきしあふるや都や有雪は

梅

粉波津の昔も梅の園はあまの心と風ぬりて

柳

淡緑をのろくくろくたねのえいせいとていふまのよ

早蕨

はら井きさるまのしり早蕨のたねはあふる

桜

春野のまき雪とていふえあふ風とあれはまのよ

春面

春面はあふるまのよとていふはとて目まのあふれ

春駒

春駒のまき雪のこととていふはあふる春駒はあふれ

御馬

春駒のまき雪のこととていふはあふる御馬はあふれ

愛子鳥

あふるまのよとていふはあふる愛子鳥はあふれ



首代

高のせくありありあつたれを難波後のいこをまかり

莖花

まじりてくまをまの朝露よりかきし様はまは

杜若

中庭の池行よりる杜若あつてさうりまをさあり

友花

信のいれねはねし用は花梅のさうりまをさあり

山吹

形まをよりちんぷんりまをさあり

三月盡

あつたまをよりまをさありまをさあり

妻

更衣

まれもねまれの文をいせよまをさあり

卯花

卯花のうもいさあつたれをさあり

葵

いさあつたれをさあり

郭公







百姓の所産のなれをえよと地井のなれをえん

六月初

同く種取の浦よ出てこもりこもりの御後よせの

秋

五秋

汝磨の園秋のころはくしりききと後よこなる

七夕

<sup>新古</sup>織女の玉付玉付をた枕のあより秋のころ露たを草

萩

よとより人のみせるはのあしを雲よりの秋萩の花

甘藷花

長ありの草のうしろのあしをたきりききと後よこなる

苜蓿

よのあしをたきりききと後よこなる

苜蓿

ひよりききと後よこなる

蘭

秋のころをたきりききと後よこなる

萩

安と死しと田のあしをたきりききと後よこなる



馬

知るいふことなきのゆゑに秋の夜は

麻

秋の暮く暮るころに中男麻の袴をひき

露

露とれあはれいひんねのいね松の下まの

骨

物籍にひとねほとんたせしあのはた

槿花

日ひさす種もよもいぬるの唯竹のむら

物違

夕霧のたらの物と川種町のたをる

月

そとをさかしてかたれぬはつとせう

持衣

衣は音とてたふらぬあはれぬの金

虫

流のりて露志がよまのし野の猿

菊

あはれぬのまはるすもつた種よまひて



初冬

竹の影がわがまを照らす秋の葉の影とて暮らして候と

九月書

初冬  
竹の影がわがまを照らす秋の葉の影とて暮らして候と

初冬

冬をしのぎて春を待つ心は秋の葉の影とて暮らして候と

初冬

霜  
うらやまの影がわがまを照らす秋の葉の影とて暮らして候と

霜

初冬  
月と花とをしのぎて春を待つ心は秋の葉の影とて暮らして候と

初冬

月と花とをしのぎて春を待つ心は秋の葉の影とて暮らして候と

初冬

文をしのぎて春を待つ心は秋の葉の影とて暮らして候と

初冬

花の影がわがまを照らす秋の葉の影とて暮らして候と

初冬

竹の影がわがまを照らす秋の葉の影とて暮らして候と

初冬



その他は年々月々先づかきつゝ其の結念なりき  
る鳥

後のよは清の香とみえつゝ心もいかにあはれ  
酒代

いさつとほを信の河海に船とめて火のあはれ  
仲樂

松風は和琴は秋のきわめて存火は節とあはれ  
彦将

所将れはよりこのをよ目にわれを物とまはれ  
炭竈

あはれをのまやあはれはあはれとあはれ  
燵火

山崎のまらまはを燵火の世ふま物と作らま  
柴書

あはれは年々あはれはあはれはあはれはあはれ  
惠

神守のあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ  
初恋  
思恋

秋のあはれはあはれはあはれはあはれはあはれ















貞治三年八月廿三日書寫畢

為重卿之

羽林郎將藤判

右以奧書本一校了



將軍家御百首 常任院

通秀 中院十輪院從一位內大臣  
法名妙益

寶隆 三條西道遠院正二位內大臣  
法名堯空

基綱 姉小路從三位權中納言  
法名常心

宗侲 松原伊賀守賢盛  
竹抄作者

右細字私加書之

將軍家御百首  
題



春二十首

都初春

水邊若菜

柳帶露

折花

閑居花

序莖

浦藤

夏十首

首及物露

里處

餘多凡

歸雁連雲

竹間花

蕊春反

松下躑躅

惜春不箇

春外花

寢元鶯

軒梅

為秋

依花待人

山田苗代

竹籬款冬

雲外郭云

故鄉搗

你夜鴉川

河夏菽

秋二十首

新綠凡

沃女郎花

戶外槿

古渡秋夕

月契秋

月前遠鴻

池葛蒲

鴻夏草

野外七夕

思綠

苔住露

松麻

禁中月

月前行客

橋五月反

樹陰蟬

簷菽

薄似袖

虫怨

為蒼鳥

草庵月

榜衣出



五言雜家

冬十首

曉發送秋

時及告冬

寒落葉

樵路霜

冬衣雜曙

河冰

泊子鳥

叢沙爰

逐日雪深

向爐火

家之歲暮

戀二十首

寄月忘

雲

煙

嵐

杜

市

江

龍

系

猶

山鳥

蜻蛉

淺茅

海松

沼繩

嚴畫

懸樞

木綿

答箕負

頭掉

雜二十首

社頭曉

古寺朔

閑屋畫

山家夕

田里夜

窓燈欲消

簷忍草

門秋

砌松

濱楸

林麻紫

暮林鳥宿

晴後遠水

磯波

名所眺







牛らつしつかに文なきの煙吹まきて花のすゝめあふむらさ

基絶

うらむく草屋の里やうほまも我すむらと花をばり

宗伴

あまほららの霞うらなひとまきいかりな林はかきと

夜寝覚書

通秀

糸くよりこやけらひてさやのあはれ枕は常となく

實際

糸をこえては雲のよの糸も糸えの故らとまらぬ

基絶

新瑞の月氣すむまら糸の月まきあはらとなく

宗伴

あまをうたゑるぬり雲竹の糸床なうら常となく

水鳥若菜

通秀

月れたら中夜うらなひのうらまきせぬ津代を祝となく

實際

うきいのこたひぬき身らるゝひは海とく摘人もなし

基絶

まらむも雲ぞのうらをのつゝみとらすぬれ寝る摘花

宗伴



神はけてあはれや清き白妙の祓はれは流るる河川なるは  
餘多し凡

通秀

いさよと世宗ありしを妻乃凡あまのふもよきえかたなり  
實際

今朝かまのこききの玉の香結て朝とにけり妻乃山境

基徳

木末まほはるぬ雪のうらあする人妻はあはれ凡るるを

宗伴

雪とこれ凡吹て妻乃まるとるもをえよき縁侘ひ

水梅

通秀

かすむ東の月ハ初とをわうへてあれの神ようつ梅く

實際

きをやめの花乃うけいもそとてちりしもいれ初梅

基徳

わすふ心を凡るをとりにし神も志ぬ川朝の梅香

宗伴

きしと我神ももう人梅香もなるとなれは初乃松凡

柳帯露

通秀

心りてあひく柳の露をくし玉の初乃きまよと何さむく

實際







花よりのわらわや痛の心秋の木末にまよふ

折花

通秀

さむらゝ春の心守たもきく候あまのね花はさつえと

實際

一枝もいひひてうらまへし後れ春も花はあまのくに

基徳

心なれ花やわらわらん折さすむにうらまへはわりこ

宗伴

ちとせよりたゆみおしとや梅をわらわす旅を志す春風

竹間花

通秀

一村の竹乃もこれさう花もあまのこもさうね春のこもさう

實際

常もねらも花ようつじしん梅候もふ折のこれ行

基徳

下折のまもほの雪や咲花の又さう川を忘れこれ行

宗伴

咲まの園生のおはれ行ますれ衣れもわらわをさる

依花待人

通秀

いにせんむらりてふれれを待人かすの春風

實際



待たひてちりちりたる人々も人れはひらき花よの世

基徳

公なき我友よりもつる者のもといぬる人をまらん

宗伴

あるらといふよといふし公も身もまらぬ者たつを

果居花

通秀

身にたぬものもなかりしつる浅ちる者れはよ咲ひ

實際

妻れ友のあはれとあひのほきのもちれはほとむらひ

基徳

妻としもむらり同也とちりてむとむらり人のをよ

宗伴

人ともむ妻のすみろのきもささぬはれ花とちり

縁春取

通秀

妻ぬるをけとさしもきんといぬ縁れらやの斬れいと水

實際

ちりつるもすみてわつものもれ花と取よあはき

基徳

縁衣志からぬよ又まきふ霧の神をかすやともう那

宗伴



ほつちの養代衣其ぬのちり里ついでいひていん

山田養代

通秀

そをいへにたつるもりじしひらのかけひついでいひていん

實際

木くれい山下水も其の回よせついでいひていん

基徳

山川をわきまをせむく山田の苗代あはすそいひていん

宗伴

そをいへしせついでいひていん

山田

通秀

一取ゆん人ううまいぬ其の非とわかれを山田はみても

實際

われより山の芝草其あみともいひていん

基徳

志をきく一惟つばとていん

宗伴

いひよつみてをわん山田人まに一葉はぬる宿のともいひていん

山下瀧澤

通秀

るを志をいへ下ていひていん

實際



若し松みより外も表の鳥は「あか」すのつし「あ

基徳

孫もあく松のせきふ岩つ下し松しわれと花も咲じ

宗伴

松のこれときこのふつ下つしむもらひせぬ鳥は「あ

籠歎冬

通秀

又著のすも「ひあ」やすらて表のれり山吹の那

實際

やへ白ふ枝もやをのこい山吹のむかひあて表すのふハ

基徳

り表の今と海さの山吹「あ」さうさうふあふ「あ

宗伴

いすすも人「あ」ふ山吹のすもこに白ふたふれ「あ

浦友

通秀

心たき「海」のあも立攻つらんあやあね松の友浪

實際

あかてを袖ハあさも折てらん「あ」立甲子此浦の友浪

基徳

そこ「あ」くう「あ」舟も甲子の海や「あ」治と候る友浪

宗伴







川原のうつらぬる卯のむの咲るのをも月分る

實際

月とまじ卯の花さけ春川の原にふる雪もすくら

基徳

花陰は咲卯のむ月原のわらう一舟出を志のふま卯

宗伴

月影のうつらぬる卯のむの咲るのをも月分る

雲外郭云

通秀

換るるるのうつらぬる卯のむの咲るのをも月分る

實際

今とけはつらぬる卯のむの咲るのをも月分る

基徳

かたはるるるのうつらぬる卯のむの咲るのをも月分る

宗伴

月のうつらぬる卯のむの咲るのをも月分る

雲外郭

通秀

吾舟にありし昔ははてよのこきて志此の朝志立花

實際

あまのこはあまのこを揚の舟よりうつらぬる卯のむの咲るのをも月分る

基徳







実隆

露もなぐし急ぐ人海の秋の形もみどりあはれ風

基総

夜更せよの形もあはれしとかがほろ木けの露もあはれし

宗伴

秋風も志のひびくは吹りて木かえ涼のほせみのてふ

川夏後

通秀

夕をせめてまの河後せんあす川あすは秋景はあはれ

実隆

川もろきこの河後 立花の川戸はあせむらうとてあ

基総

水急のうも川遊よみとほしてうかや麻の青葉あはれん

宗伴

河後して久々に新田川あはれ秋の浪をなす那

秋二十首

新秋風

通秀

秋風も吹くももくまのあはれて老れ海そよふもあはれ

実隆

吹も河もあはれとあはれとあはれと秋の風あはれ

基総



葉と木もいに吹凡よ秋乃身少くむとぞる一かた

宗伴

交りあふ葉れもも打をいし秋きこり那よの海風

通秀

七夏のま回をきくといともやもと風とらん那今七葉

實隆

名にむらくらさくわつりを天河あふこり那の早あき

基徳

浪の早のあきせの若海くか那の海もよそにをくじ

宗伴

葉のうよけさとる露と天のこ那の御中へ能きとる葉

簪萩

通秀

萩のよをそのもむ朝よの葉かれよ何と吹と秋の夕風

実隆

こまの中を凡るをとりこみり末葉吹入朝乃志こかき

基徳

朝におつる露の露も秋の夕に乱るわゆる萩の夕風

宗伴

浪の音を朝よの萩よ打とて何と浪をよ秋の夕風

沃女郎花

通秀



如郎をよそへば人のあかえみても公乃をよそへば

實際

新しわしを種原のちも如郎花をれよ公をうけておまむ

基礎

せうつみし海邊の水は新し今も落はしをみるは

宗伴

八穂よ阿のぬは入るをみるやしはすしわかと流るは

畧秋

通秀

又新乃畧のらをもを咲とひて色もひるよにわ秋秋

實際

萩の紀ちるや畧へ乃つるもわき秋乃及那

基礎

は葛よふ畧の秋原秋凡よりつるふとさう今縁の

宗伴

をちかこよりてまふれ小秋咲畧の屋こに馬の者も

舊似袖

通秀

たさしとさ人の舊うちされこ切人乃神をわれを

實際

ふらわまはまのくもあしを落きと秋凡の秋とらる

基礎



公方を尾を神の夕風をを世を秋の霧をうまはる

宗伴

むす秋あけき神の報結ぬかかぬ月やとすん

戶外槿

通秀

山陰や志まう斗る葉の戸にむもさぬくはわさうか

實際

たうてんるうひもわ式あまの戸ををぬらるぬあは

基徳

をさくとくは舟にららん松の戸るわらう結まきたれし朝風

宗伴

東の霧あきとてらんし国入たれあふまきける槿のよか

昔経霧

通秀

凡あつく又流こて熊中川にけらの秋やいと川田草こ

實際

はまよころ岩ぬさむも松風よ音るされぬ霧とおはる

基徳

岩ぬの霧あふまは合陰よ音る神もも店をりぬ

宗伴

こけあまの山路の嵐をさうり神はて霧とおはる

虫怨

通秀



まじすゝるしきふら鳴ん秋の虫のせほらうんもせよわし  
實際

鳴虫のうらやうふらうらうらあそびてもあはれし  
基礎

お海のすい海風はむしりたるのや里のきんる虫のこま  
宗伴

きりりくすゝるなまきこころわきとにきんるこころぬ秋の抗よ  
右後秋々  
通秀

夕さけはうらをせと成みまこころき旁にけしうらよとれき指  
實際

松よ吹浦もの凡も秋かを又おれきこいわけのせと  
基礎

秋ふらむいさすこころ川舟ありはとの秋入いふらま  
宗伴

こまこころ神のこころうらな旁にあはれやこころ秋のきん  
松麻  
通秀

松よきんる人けんむら夕山ま又こまこころ秋入を麻  
實際

と後よりこころ麻やこころ海のこころをけりても書やあらん  
基礎



ふ木伐松ふけよさ月麻も書すりふれふてし

宗伴

枯橋原さうそふふ高麻やはは海つる木の陰あせん

為善翁

通秀

天は雨つちの夕いふれと都の秋よおてきぬん

實際

川はさう湊いよむと波よさふをうてたつるが

基徳

為のらふ夕乃海おらとひてとほは農よ秋はう物

月映秋

通秀

わさ海一の秋さうかき雲深の神えかじん秋の月影

實際

いふん秋おれせん天地とさふ絲をる月乃おつと

基徳

おののちかきぬ月の美人よの世の秋をらさうはつん

宗伴

月なき秋まそ阿へ花小知ひ雪よ光ふえ海はん

禁中月

通秀

うららしいゆをれ月をわみさ守あつてく火も煙消り

實際



にうまの光もあらずとも月めもわらわそのおひらる

基徳

秋の月の光をさそくし沖海より月の朧もかけひきん

宗伴

秋の月もさそくし沖海より月の朧もかけひきん

草庵月

通秀

夏をきく秋もさそくし沖海より月の朧もかけひきん

実隆

月をきく秋もさそくし沖海より月の朧もかけひきん

基徳

へそをく月もさそくし沖海より月の朧もかけひきん

宗伴

夏をきく秋もさそくし沖海より月の朧もかけひきん

月前を瀉

通秀

波のうらみ身津志も松月朧のさそくし沖海より月の朧もかけひきん

実隆

波のうらみ身津志も松月朧のさそくし沖海より月の朧もかけひきん

基徳

水無川よみもさそくし沖海より月の朧もかけひきん

宗伴



あつ月もすんかうのほつじをしまのあま秋の巻よ  
月形初巻

通秀

り末を能よと守りしとくは月よからる芝のあ

実隆

深敷も教をうすくしあつておの月よたむは

基徳

あつらつる友をよふ人々をさし月よたむは

宗伴

さしぬおある人々あつてあつらつるのあつ月

揚衣巻

通秀

あつらつるあつれもやうまを能くまらおひて衣  
うん

實際

あつらつるあつれもやうまを能くまらおひて衣  
うん

基徳

あつらつるあつれもやうまを能くまらおひて衣  
うん

宗伴

あつらつるあつれもやうまを能くまらおひて衣  
うん

通秀

あつらつるあつれもやうまを能くまらおひて衣  
うん



實隆

飛鳥とてさつづ梅はのちの春さう紀乃真の夕ぐれ  
基総

いさよの春乃木末もむ秋のよまこをささり居られ  
宗伊

さやうさつづみや梅ひらのお糸乃春はさきとさつづ  
種彦送秋 通秀

さゆや秋もまよの種乃春を尾とのさつづみとさ  
實隆

種のみよは秋もされぬと糸の言ねらるゝと宗彦のさつづ

基総

松さる尾乃種もむ秋をさるふれはさつづ  
宗伊

さつづれ小松の露は春もさつづ秋もさつづ種のみよ  
冬十首

村西春彦

通秀

さつづめとさつづさつづと村西春彦もさつづ神とさつづ

実隆

さつづ秋のさつづとさつづをさつづもさつづ初時なれ  
基総



りや秋らなるうらなれ世をまはるる光の

宗任

くねり秋も深はる神のこゝにたつるこゝろにたつり

艾原葉

通秀

国の人よ葉ひら相のらりききまのあはれあはれハ

実隆

萩乃葉に秋まきとるハ長と落葉乃庭よのこけの宿

基徳

山風はつるまはるのまよこい身にしむまのるむちり

宗任

しらまにせられて致の山氷や紅葉なるまよちりて落らん

推洛霜

通秀

山人やれなるるも紅葉まよるの月よわひくはらん

実隆

まばらりの秋の葉の物まよるまよるまよるまよるまよる

基徳

山人まばらよらつるまばらまよるまよるまよるまよる

宗任

山人新乃の秋まよるまよるまよるまよるまよるまよる

冬原龍曙

通秀



暮らひしむく神えしとちり家とてなれ板の月を  
長らき

美澄

ふきんの神えの板はくもも暮ははれあはれとて  
なれ

基徳

いよまじひ意をたのめ月影よふ花をりあまそうれ  
るに

宗任

さむらひの板にけしめ天乃る月の影しあや  
らん

川中

通秀

花の影よの思成とてさ川の汀るあひさひう  
ちまん

美澄

夜をくひらりあはれはあまの月をりけはた  
なるまふ

基徳

いせらの暮しとてはさ志賀の浦や汀はく  
こゝろの波

宗任

波の音松よ海とて志は浦や真と汀はな  
り水糸

池子鳥

通秀

すまは海や浪乃松よ浦をりかたを  
神えとてん

美澄

まれのあまのりしあまのりしと家もあ  
れ波の板

基徳







少くは上へは下らん今もひてさへもたのちのまこの

実隆

堀大

うけわらうるぬの影はほのそとみ家路記園乃集

基徳

ふよあつたはほのこころの消いたる園の集

宗任

園の心園の心はたはたをうらたうらたうら

家・兼善

通秀

まきの春の心はたはたをうらたうらたうら

實隆

まきまき家井の心はたはたをうらたうらたうら

基徳

まきまき家井の心はたはたをうらたうらたうら

宗任

まきの心はたはたをうらたうらたうら

為二十首

為月意

通秀

まきの心はたはたをうらたうらたうら

實隆

まきの心はたはたをうらたうらたうら



巻終

西朝の御代に於ては形見とてよりき淑く御政月新

宗任

徳とてまもるる御代に我も御代に御代に御代に

宗雲

通秀

かちより御代に御代に御代に御代に御代に

美隆

此来は御代に御代に御代に御代に御代に

巻終

隔として我も御代に御代に御代に御代に御代に

宗任

くもても御代に御代に御代に御代に御代に

宗雲

通秀

世老とて御代に御代に御代に御代に御代に

美隆

世に御代に御代に御代に御代に御代に

巻終

此の御代に御代に御代に御代に御代に

宗任

此の御代に御代に御代に御代に御代に



赤松志

赤松志

とらふに月日にかへて松をまゐる人はねむるそ  
美隆

あはれいひのたうくそねの松をたや神とは意乃洞とせら  
基徳

ひまふちくまの松乃神のときき井の松よつるそひん  
宗伊

ほくもねの松なるれ目にそく松一はひよきといひらぬ  
赤松志  
通秀

いふせん常盤乃松をたのこともねふ神のときと何ぬも

實際

すのねらあとき車あふちたぬを神とくそこの松乃りあ  
基徳

とらふに月日にかへて松をまゐる人はねむるそひん  
宗伊

いふせん常盤乃松をたのこともねふ神のときと何ぬも  
通秀

あはれいひのたうくそねの松をたや神とは意乃洞とせら  
實際

ほくもねの松なるれ目にそく松一はひよきといひらぬ



基徳

ふし海よ志うまの市ちりり可たまからけり中

宗伊

ふたせん思ひつらよかしくしおびんよらうく市ちり

芳江志

通秀

名さ乃之行いせくも難波よりつらもや契るらん

美隆

名ふもさこの月乃るふありく夢に記ける神を

基徳

今世もや

名ふもく燈乃る本乃るきねそ野く物海なるん

宗伊

繫いさよい細江よひき捨るふ舟の繩乃るん

通秀

ふたせん落り海に流す珠をせくいん好い神のん

美隆

かふ松ゆるく族と流の糸れくえくく記申れ繫よ

基徳

神よ落りての流よ流すよの甲かふよらそせきん

宗伊

流浪乃るいんいんいんは花のうもぬす神をなせむ



寄原迄

通秀

ありてこゝをすゝふありてわきとりの如く来るを  
実隆 春けき

竊乃身れやと消きは来た兼わつててうと繁り

るは

基経

ふらりあゆみのつらふ記とい拙きわめた麻衣のせを

宗任

三たふさくこぼらり拙乃先をくせといふを

あふ鳥迄

通秀

宗任

繁一ひまの細いよひま控りふ舟の境乃とて

寄原迄

通秀

ふせん流り渡り流は流とてくといふれを神の

実隆

ちみ控りぬれ流の系あゝとて入地中流り

基経

神よ流り心の流よまの甲がふよとせむん

宗任

流浪りくはらふに流りて流りて神をく















巻終

宗任

少き江よふはなまにりてふかき記をたつるを  
龍波にりあふさるを衣もみを行てあふまきん

巻終意

通秀

日突あわさる首と山乃下樋乃やと始ぬ

実隆

ふけりたの下樋とりあはたぬもよふとあ

巻終

まもれとくらのゆるきと枯かけるあつと

宗任

死行乃中り乃世ふけく神よりのもたれと

巻終意

通秀

かけてふ人かひそいりあひ目較も松乃中と

実隆

はねと記を神やうあふまよかき換る

巻終

ふけりま柳乃枝よかきたなふあ神もひか

宗任

みあふあふくさるよまよとあひか

あかん



芳答篁志

通秀

面影と三葉のつらさよそみあはじきもが記すたあま

実隆

わさいのそ名われそまよふれしよありたのうき

基経

つらかりのつらまむらみあるふれはうらひぬん

宗任

人乃らき名とそまよふもははれそまよ水のみ

芳願採志

通秀

ふそせんそまよまを尋てもふそまをれぬらりせば

實隆

竹川乃三れぬうもかけくもそそ花の白ひか身よ

基隆

そまよや高乃命れあつてそまをれぬらりせば

宗任

神みくうたもそまをぬ人のせ乃花れそま

雜二十首

社从曉

通秀

神みくうたもそまをぬ人のせ乃花れそま

實隆



新もまきくやふきの名もきり林こふむ森れ

基総 神領

新きうとをひえの月乃有のもえをうと神の玉き

宗作

若くは一え代くを照しこも松の月乃の神

古寺刻 通秀

新くとも末よふそふりうの寺に法たふも

實際

朝日新也いふ言母ふりある世にふも

基総

心寺いらむとさきこの枝打て新きよたよ何痛しと

宗作

新目とことこの木すきの言確もりくゆ自ふとれ

用原畫 通秀

開乃たに午の貝くうやねた又時をうる意高乃と念

實隆

打出乃漢よぬまし今新の神ひる満ふかりぬ開は名

基総

ついでん目をもけけり開の戸乃月を道し高は念

宗作



わさもよし純乃開致てびふ目た苗よ梅りてそちりせき

山家夕

通秀

邪はそけいと終一風乃暮ふぬふた夕かむとも

実澄

ふあふ夕にるれを書はありも神の露をまひ

基徳

旅のことふおれあふひち終ぬ書やつか居らん

宗仔

ふ人よらむあひて目かまを居る松風發うひん

田里夜

通秀

ふかたのふく華をうつくしう衣能る死し雨のらん

実隆

月もそと鳥ね回せつ洞の本と氏た家為に徳らん

基徳

ふれくはな家兼もそふの甲中其書の産をらん

宗仔

かりやひぬり心の春乃まひりらんし書よふの

山家秋游

通秀

ふ家の雨五年乃そいさうやらぬさうまし清ぬ意た悦

實隆



まてあう我いんうなせむよかりけしむえん意乃  
とり大

基徳

意やうくひやてりな記訂よかの茶葉の露を  
たえく

宗任

悔乃意ふじへははれ雷林乃毫乃のけそのいふ

菅忠草

通秀

新こわれく首あふとふりやうまうは茶葉は出せ

美澄

今も誰のりえりせすつふん夢の新乃やまはあふ

基徳

新よはあり一色乃これりやうを新を掃よりや

宗任

新あまきと馬の草も後りけ色乃黒い人やる記

門松

通秀

新よはありよまきのよまかんこまや一色馬路の道

実隆

とくちやるたまきをのり松のまをぬもゆく松とら門

基徳

松の門は松きくも人のまをぬくを教るぬあま引れ

宗任



とらくのとひは門に集くよ音じと枝を馬の如く

物松 通秀

扱く此をれとひる老の松伐にしるぬあ枝のつか

実隆

かきく老てまのみきりにそりりせぬ老もさるん枝

基総 言のこ

る一着れその程ちやけさくく物乃松おひをりぬ

宗修

うつうり老もろう一言の松ももろけをさる

淡楸 通秀

喜ふ淡松うえは道なき枯たりのもちり林れ

實隆

吹のいよも物もさるひ浦風よ枝をさるぬあさる

基総

ちれと又の別とれた楸も淡乃其物をわぬ取那

宗修

ひさまらり父也秋まらりる浦風きりる浪の海し

榊原 通秀

かしてわらもよまぬ我居るものまはるりる

実隆







人曰く此の山にありては水とては

改改

通秀

其の山にありては水とては

実隆

此の山にありては水とては

基總

此の山にありては水とては

宗修

此の山にありては水とては

名和能重

通秀

此の山にありては水とては

実隆

此の山にありては水とては

基總

此の山にありては水とては

宗修

此の山にありては水とては

宗車祚祇

通秀

此の山にありては水とては

実隆



その中に三編をすしてを電車にけし邦人  
基總

皮固乃名をこころをうけのけし邦人  
宗伊

そのこれつるもけし小車の強人乃小向なり  
通秀

たかきをうけしをうけつるのけし邦人  
實際

かの玉をうけしをうけつるのけし邦人  
基總

後の世にきれやびしをうけつるのけし邦人  
宗伊

そのもつるもけしをうけつるのけし邦人  
通秀

その乃をうけしをうけつるのけし邦人  
實際

彼風をうけしをうけつるのけし邦人  
基總

舟の月目もきよなりしをうけつるのけし邦人  
宗伊



此の浪の玉乃緒よみあきしほつるあぬをよむ方も記  
あら迷懷 通秀

みそまけなけてらつこのすれり人のむらさきと  
実隆

ねりよの人をよん様らけぬわをるらりける  
基總

よそまをるをらつるけして代よる後つこ  
宗伊 通秀

毎とそも目敷おのこらとりおる記をよみせん  
芳國祝言 通秀

天うきまをくねらひおるまのうこもあふと

あふけらなまき韓國それふも皆我言にらひ記ける世を  
實際

吾をなかり新乃まらまうこ記するらちらひまは福まかり  
基總 宗伊

國と好らるこの事やせよひらまらるまを露れらあ  
宗伊







